

本科 1 期 4 月度

解答

乙会東大進学教室

東大世界史



1章 イスラーム世界 I

添削課題

解答例

ササン朝が確立した宰相制や徴税機構などの中央集権的支配体制が受け継がれ、イラン人は官僚として採用された。文化面ではガラス器などの工芸品の作製、哲学・医学といった古代ギリシアの学問の研究が引き継がれた。(100字)

解説

《ササン朝がイスラーム世界に与えた影響》

ササン朝がイスラーム世界に与えた政治と文化の影響が問われている。受講者諸君としては、文化面については比較的容易に解答できたのではなかろうか。イスラーム文化の特徴は、アラブ独自の文化に加えて、積極的に非アラブ（外来）の文化・学問を受け容れた点にある。外来とは具体的にはギリシア・イラン（ペルシア）・インドなどが起源であることをさす。ササン朝ではペルシア文化を基礎にヘレニズム文化を融合した国際的文化が発展し、金銀細工やガラス器などの工芸も生み出した。これらがイスラーム世界へ非アラブ由来の文化の1つとして継承され、さらなる発展を見た。

では政治面での影響は何か。当然ながらササン朝の政治のことが頭に浮かばねば解答の方向が見えてこない。高校教科書でササン朝の政治について詳細な記述がなされていることは少ないであろう。だが、ほとんどの教科書で、ササン朝では中央集権的な体制が確立していた点は触れられている。ササン朝では、アケメネス朝を範として、全土を州に分け、監察官を派遣する体制が見られ、6世紀のホスロー1世時代にはディーワーンと呼ばれる大臣の運営する行政機構の整備がなされ、中央集権的支配体制が確立した。イスラーム世界では、ウマイヤ朝中期から官僚機構の整備が始まり、アッバース朝ではササン朝の制度から学び、ワズィール（宰相）を頂点にイラン（ペルシア）人を登用した官僚機構による中央集権体制が完成した。

別解

政治面では、ササン朝ペルシアでの官僚制を整備した中央集権体制はアッバース朝の国家体制の基本となった。文化面では、ササン朝で発展した金銀細工・ガラス器・陶器などの工芸技術がイスラーム世界に継承された。(99字)

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

2章 イスラーム世界Ⅱ

添削課題

解答例

7世紀前半は、選挙で選ばれたカリフが、ムスリム共同体の単一指導者として政治的実権を有した。11世紀後半は、複数のカリフが並立し、その地位は世襲されていた。アッバース朝カリフはスルタンに政治的実権を委譲、ムスリム共同体の象徴的指導者となった。(119字)

解説

《カリフの変遷》

まずは、問題文の要求を把握しなくてはならない。「7世紀前半と11世紀後半を比較」という指示は、いったい具体的に何を要求しているのであろうか。「7世紀前半」に関しては容易で、ムハンマド死後の正統カリフ時代を想定すればよい。各史実の時期を曖昧に捉えている人は、「11世紀後半」で少し悩むかもしれない。11世紀半ば、セルジューク朝がバグダードに入城し、アッバース朝カリフから政治的実権を委譲されているので、それ以降の時代であるという理解が必要である。このことを踏まえた上で、問題文の要求である「政治権力者としてのカリフの実態」を比較すればよいことになる。

一応、「カリフ」という語について整理しておこう。ムハンマドの死後、アブー＝バクルが「ハリーファ＝ラースール＝アッラーフ（神の使徒の代理）」として、ムハンマド亡き後の教団を率いることになった。（なお、この「ハリーファ」という語の英語訛りが「カリフ」という語である。）カリフは、あくまでもムハンマドの代理人であって預言者ではない。すなわち、カリフがアッラーの啓示を受けることはなく、カリフの権力は当初より宗教的な事柄にまで及ぶものではなかった。（ムスリム共同体を政治的に率いる立場にあるのだが、『コーラン』の内容を逸脱するような形でムスリム共同体を率いることはできないということ。）すなわち、カリフの権力は政治的な事柄のみに限定されているといえる。このことを前提として、各時期における相違点について考察していこう。

相違点・1

正統カリフ時代においては、カリフの選出はムスリムの合意に基づいていた。例えば、初代正統カリフのアブー＝バクルは、ムスリムの実力者たちによる互選を経て、メディナのムスリムのほぼ全員から忠誠の誓いを受けている。こうしたことから、正統カリフ時代では「カリフが選挙によって選出された」などと表現される。（「選挙」という語から、まさかと思うが、現在の衆議院選挙のようなものは想像しないほしい。）

細かい話だが参考までに記しておく、正統カリフ時代からカリフ位をめぐる争いは存在しており、とりわけウマイヤ家（第3代正統カリフのウスマーン、ウマイヤ朝の建国者であるムアウィヤなど）とハーシム家（預言者ムハンマド、第4代正統カリフのアリーなど）のカリフ位をめぐる争いは激しかった。661年にはムアウィヤがカリフを称したことでカリフが2

人になってしまう。両勢力の間では歩み寄りもはかられたのだが、こうした歩み寄りを妥協的姿勢と批判したハワーリジュ派がアリー、ムアーウィヤの暗殺を謀った。結果としてはアリー
の暗殺のみに成功し、ウマイヤ家のカリフのみが残った。こうした経緯を経てウマイヤ朝が成
立し、以降のカリフ位はウマイヤ家によって世襲することとなった。いわゆる世襲カリフ制の
始まりである。11世紀後半においても、この世襲カリフ制は引き継がれているので、まずこ
のことを相違点として指摘することができよう。

相違点・2

正統カリフ時代においては、カリフは1人しか存在しなかった。(上述のように、短期間は
カリフが2人いた時期もあるが、これは例外と考える。)しかし、10世紀に入ると、アッバ
ース朝の弱体化が進む中、チュニジアに建国されたファーティマ朝の君主が建国当初よりカリフ
を称した。さらに、後ウマイヤ朝の最盛期を現出したアブド＝アッラフマーン3世もカリフ
を称し、これにより3人のカリフが鼎立する状況が生まれた。このことは、イスラーム世界の
分裂を示す象徴的な出来事であったといえる。このように、当初ムスリム共同体の単一指導者
だったカリフが複数存在してしまっているという状況は、7世紀前半との相違点といえる。

相違点・3

1055年、アッバース朝のカリフが、政治的実権をセルジューク朝のスルタンへと委譲した。
このことから、正統カリフ時代のカリフのように、政治的権力を行使することが事実上不可能
となり、カリフはムスリム共同体における象徴的な指導者としての地位に留まった。以降もム
スリム共同体における精神的支柱にはなり得たかもしれないが、実際に政治的権力を行使した
わけではない。これも相違点である。この3点を比較しつつ解答を作成していけばよい。

できる限り、問題文の表現に配慮してみた。例えば、「ムスリム共同体」「単一指導者」といっ
た表現は問題文の言い回しを踏まえたものである。また、3カリフ鼎立という表現は回避した。
「3カリフ鼎立」とは、一般的にアッバース朝・ファーティマ朝・後ウマイヤ朝のカリフが並
び立つ状況を形容した表現だが、11世紀前半の段階で既に後ウマイヤ朝が減んでいる(1031
年滅亡)ので、不適切と判断したからである。また、「カリフがスルタンに政治的実権を委譲」
といっても、これはアッバース朝のカリフについての話なので、他地域でカリフ位を主張して
いる人物に当てはまる話ではない。よって、解答では「アッバース朝カリフ」という表現を用
いてみた。

論点さえ押さえれば、簡単な問題だと思ったかもしれない。実際その通りである。だが、実
際にこの3つの論点を自分で見出すことができたか、それが重要である。

この3つの論点を単に覚えて学習を終わってしまうのか、この問題に対して、できる限り自分
の力で考えようとしたか、その姿勢の差は、本番での大きな差を生むことだろう。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提(問題の読み取り方)
が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みに
しないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

3章 イスラーム世界Ⅲ

添削課題

解答例

ガズナ朝・ゴール朝の侵入からデリー＝スルタン朝の統治を経て、ムガル帝国成立でイスラーム王朝の支配が完成する。この頃の北インドにバクティ信仰が広まっていたことが、その信仰形態の類似性からスーフィーの活動を容易にし、イスラーム教の定着を助けた。(120字)

解説

《インド亜大陸へのイスラーム教の定着》

政治的側面は「10世紀末」、アフガニスタン方面からのガズナ朝の北インド侵入から書き始め、「16世紀前半」のムガル帝国の成立で結べばよい。北インドでは7世紀中頃のヴァルダナ朝瓦解で政治的統一が失われた後は、ラージプート時代と呼ばれる諸侯が争う分裂期が続く。このことがカイバル峠を越えてイスラーム王朝であるガズナ朝・ゴール朝の侵入を容易にした一因であった。奴隷王朝が成立することでデリー＝スルタン朝(1206～1526)が始まり、その最後であるロディー朝を倒しムガル帝国が築かれる。ムガル帝国の建国者バーブルは、もともと中央アジアはフェルガナの領主であったが、ウズベク族に押されてアフガニスタンのカーブル(カブール)を征服した。その後、ロディー朝の内紛に乗じて北西インドから侵入し、ムガル帝国の建国となる。

問われている文化的側面はやや手ごわいが、高校教科書にも記述はある。各自で高校教科書の記述を確認しておこう。

ヒンドゥー教のバクティ信仰(バクティ運動)では、こまごました儀礼や苦行・断食などではなく、ひたすらにヴィシュヌ神(の化身であるラーマやクリシュナ)を信仰すること、ひたすら神の恩寵を願うことで救われるとする。バクティ信仰は南インドで興るが、14～15世紀には東・北インドにも広まる。他方、イスラーム教のスーフィズム(神秘主義)がイスラーム世界のアフリカ・インド・東南アジアなどへの拡大に大きく貢献したことも高校教科書に記載されている。インドにおいてスーフィーは、平易な言葉でヒンドゥー教徒に対しても、ひたすら神との合一を求め、その結果としての神秘的体験は神の恩寵であると説いた。難解な教義や高度な思弁でなく、ひたすらに神を信じる宗教活動の点においてバクティ信仰とスーフィズムの類似性があり、15～16世紀の北インドでこの2つの動きが併存した。このことが人々の間にイスラーム教を浸透・定着させてゆく重要な役割を果たした。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提(問題の読み取り方)が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。



Z-KAI

会員番号	
------	--

氏名	
----	--